書評

東条操先生の「標準語引分類方言辞典」を手にして

広戸惇

昭和二十六年もいよいよ暮れた十二月、我々ははじめて「全国方言辞典」を得た。一ケ月後には再版が出、今日既に十版を重ねている。それにはそれだけの価値と世の要求の切なものがあったのに外ならない。それにも拘らず東条先生がはじめてこの方面に志されてから既に四十年に近く、この間出版の計画もその都度採算の立たぬものとして一顧もされず、たまたまその機運に恵まれると不思議にも種々の故障が続出してその度に中止となった運命を悲しまれた事は序文に明かである。しかもこの間、関東大震災に全カードは灰燼に帰するなど茨の道を踏みわけて「全国方言辞典」は世に出たのである。先生の御感慨もけだし無量のものがおありになるであろう。この辞典の歴史はそのまま東条先生の歩まれた御忍耐の道であり、又全国方言学徒の先生と共に歩んだ歴史でもある。

○

こうして出来た「全国方言辞典」も、さてこれを直接利用する段になると、はたと当惑したのは私一人ではあるまい。と言うのは一般の辞書とは違って、自分のよく知っている方言語彙を除いては所要の語彙を引き出す事は容易でないからである。例えば蟻地獄一語を調べるためには結局は全巻を丹念に目を通すより外方法がない。折角の宝庫も一つの宝を探し出すまでには容易な事ではない。

世間には「全国方言辞典」を一日何頁か読む事を楽しみにしている人もあると聞く。そうした特殊の人を除いて、実際に利用する者のためにはどうしても索引が必要である。一地方で出版された方言集でも同様な不便に煩わされる。まして全国的なものになるとなお更である。この事については東条先生が「全国方言辞典」の序文に「特に部門別索引を欠いたのは諸種の事情から止むを得なかったといえ残念である。これは機会が与えられたらまず補いたい」と既に断って居られる。

○

しかし幸な事には、その後僅か三年で、

私達の待ち望んでやまなかった「分類方言辞典」詳しくは「標準語引分類方言辞典・附全国方言辞典補遺」が遂に出版されたのである。そして全巻の約五分の二は、さきの「全国方言辞典」に紙数等の関係で載せる事の出来なかった方言語彙の補遺である。「全国方言辞典」の語彙は本辞典を得て一層完備した事は勿論、標準語による部門別分類と、総索引を得る事が出来るようになった事は、私達のひとしく欣喜したところであった。

したがって「分類方言辞典」が「全国方言辞典」に対する関係は、単なる続篇と言うべきものではなく、表裏一体をなすものであって、本辞典を得てさきの「全国方言辞典」も利用の方全が期せられ、その真価を無限に発揮するに至ったのである。宝庫は今や縦横に通路が設けられ、大きな明り窓が設けられた。未知の欲する語をとり出す事はまことにたやすいものになった。

「いわゆる方言辞書が、国語教育者の、その土地々々での方言指導の毎日に、すぐに実際に役だつように工夫されないものであろうか。研究一般のために学徒が利用する辞書であると共に、教育の実際家が常時利用して有効というようなものになし得ないものであろうか。索引の諸方法なども、ここに考えられると思う」とかつて「全国方言辞典」に対し本誌の書評によせられた藤原与一博士の御希望は、この「分類方言辞典」によってことごとく達せられた。そしてこの度も、千葉大学の大岩正仲氏がすべてを担当された。僅か五千や一万のカードの整理でも容易ではない。まして部門別に更に標準語別に分類する事は、機械的に分類するのとは違って随分頭を悩まされたであろう。他の辞書とは異った一層の配慮と苦心とが要る。御労苦に対して感謝を捧げたい。

○

「分類方言辞典」の内容組織はどうなっているであろうか。書名の示す通り標準語でたやすく引き得る「部門別方言辞典」でありそれはそれ自体の体裁と価値とを持つとともに、さきの「全国方言辞典」並に本辞典の「補遺篇」を標準語で引く事の出来る総索引もかね備えているところに意義と特色とを持つ。それは部門別に、標準語の見出しのもとに五十音順に周到な用意をもって集められた全国方言語彙の一覧表的辞典でもある。

分類は従来の方言採集手帖の分類そのままではないが、「全国方言辞典」並に分類方言辞典の補遺篇の全語彙を「天地季候・鳥獣虫魚・草木菌類・肢体健康・服飾容姿・飲食嗜好・住居坐臥……等」十四項目に分類、問題の多い人代名詞・応対詞等は社会交通の項の附録に、間投詞・接辞・助動詞・助詞は一括して行動性情の項の附録とし、数詞・助数詞は事物場所の項に実に要領よくまとめられている。一例を挙げれば、巻頭の語は天地季候の「赤潮」であるが

あかしお―↓　しお

と記載されてある。したがって「しお」の語を引けば

しお（潮）（本）いた（古言）
〔赤潮〕（本）きさりじお・くさりじお。
〔黒潮〕（本）みさきのしお。
〔満潮〕（本）いっぱいにち・がんぶり・きしお・ぐんばい・こみしお・しおいっぱい・しおごみ……（略）
（補）ずばい・にちしょ。
…
…（以下五十七行略）

の如く更に次頁の二段にわたって「潮」に関するすべての語が集められてある。使用地を知りたければ本は全国方言辞典を、補はこの辞典の補遺篇を引けばよい。だから若し農村漁村に関する語彙の全国的俯瞰を行うには、四一〇頁から四四九頁までを

一覧すればよい。例えばあぜ（畦畔）について は単に畦の各地の呼称以外に、田の隅の畦、畑の畦、草の生えている畦、嶮岨な畦等々、田畑を耕作するために生じた畦の種類状態に応じて、我々の想像の及ばない幾多の命名を見出す。それは必要に迫られかつ万人に承認を受けた命名に違いない。時枝先生のおっしゃるように、同一物に対する異った名称は、同じ物に対する人間の把握のしかたの相違から来るものであり、その把握の仕方を見て行くと、言語創造の根本に連なる問題も分って来ようし、又こうして必要な言語を新に作り出し、伝えた人達の歴史や環境を調べるならば、その創造力のたくましさに驚かされるに違いない。それは直接に国語史の基礎的研究にも深い関係を持つものであり、或は言語教育の生きた資料でもあり、その立場々々で無限の価値を持っている。このような数々の問題を秘めて、幾多の語が整然と分類され配列されてあるのである。

○

又たとえばとかげ（蜥蜴）について岡山県の方言を調べる事としよう（事実私は昨夏この方面の事で岡山県を歩いたのであるが）。巻末の「標準語による五十音全索引」を引けば、四七頁に容易にとかげを見出す事が出来る。ここには「全国方言辞典」と本辞典の補遺篇とに載せられたとかげに関する全語彙が五十音順に載せてある。岡山県では邑久郡に「かたこし」阿哲郡に「ぞうりきり」の方言のある事が分る。更に鳥取県に「じょうりとり」「ぎょうとい」のある事も分る。どんな種類の調査でも予備知識は必ず必要である。予備知識の欠けていた為に、必要な話を採集出来ずとんだ失敗をする事は我々のよく経験するところである。この辞典はそれを十分満たしてくれる。

又労せずしてとかげに関する全国の分布図を作る事も出来る。学校に於ける言語教育に、今まで知る事が出来ず不便をかこっていた自己の居住地以外の言い方についても、容易に知る事が出来るようになったのは、まことにこの「分類方言辞典」の恩恵に外ならない。今後の国語教育者の方言指導に本辞典は一転期を劃するであろう。

○

さて第二部とも言うべき補遺篇は「全国方言辞典」に漏れた主要の語が新に登録された。この中にはロドリゲス日本文典・房総三州漫録その他江戸時代のみならず明治前期までの文献の語も加えられ、更に島袋盛敏氏の稿本琉球語辞典の中の重要な語も収録してある事は、本篇の価値を一そう高くしている。又七一二頁以下は都竹通年雄氏の手になる全国の小詞（助詞・助動詞）が添えられた事は有難い事であった。巻頭には平山輝男氏の色刷りの全日本アクセント分布図、七二九頁以下は江戸時代から現代までの主要方言関係者が著者・発行年次等と共に掲載されてあるのは、「全国方言辞典」の解説と併せて利用者研究者のために至便である。

○

藤原博士が「全国方言辞典」について述べられたように、書評などとても出来得る事ではない。本辞典を利用させて戴く者の一人として、又末弟子の一人として御礼を申述べたまでである。今後この二つの辞典をもととして、英国方言辞典六冊に劣らぬ全国大方言辞典を一日も早く完成させたいものである。そして又出来うるならば、全日本方言文法辞典、同音韻辞典もこれを機会に学界の各分野の協力によって出現する日が待たれる。

昨年来御静養中の東条先生の御平癒を心から御祈りする。（東京都千代田区神田神保町一の一七東京堂・昭和二十九年十二月発行・七八〇円）

——島根大学助教授——